

## あとがき

私が大阪市立大学大学院に進学したのは一九七五年四月、それから四十年あまりが経過した。その間の主な研究成果は拙著『日本ファシズムと労働運動』（校倉書房、一九八八年）、同じく『日本労働運動史序説―紡績労働者の人間関係と社会意識―』（校倉書房、二〇〇九年）の二つの論文集におよそ集約できる。だがその二冊の中に菊池謙一の名は一度も出てこない。菊池さんは私の主な研究対象というわけではなかったのだ。にもかかわらず菊池さんとは、長きにわたり不思議な縁があったように感じている。

その理由として、まずは菊池さんが師として仰ぎ、かつ深い影響をうけた羽仁五郎を、私が卒業論文でとりあげたことがあろう（のち「羽仁五郎の歴史思想と人民戦線」『歴史評論』第四一―号、一九八四年）として発表。菊池さんの先生の歴史思想の批判的考察、そんな難問に向きあうことをとおして、私は研究生生活のスタートラインに立つという気になったわけだ。

それから二、三年、いや四、五年あとのことだったろうか、大阪歴史科学協議会の例会ないし研究部会の終了後、いつものように参会者が居酒屋に流れていったが、そのときたまたま同じテーブルの席にいた故高橋彰先生（大阪市立大学・西洋史）が次のような話をされた。マルクス主義の方法によるアメリカ近代史研究の草分けともいえるべき、すばらしい仕事をなしたにもかかわらず、その人は共産党の活動に献身することで、研究者としての人生をまっとうできなかつた、それは学界にとって大変な損失だというのである。

どんな脈絡でそれが話題になったのか、その人の名はなんといったのか、などはまったく記憶がない。だが高橋先生のそのときの話しぶりは、鮮明に思っておすことができる。そこには政治闘争を優先する共産党の犠牲になった知識人、というようなニュアンスが含まれており、私は「なるほど、ありそうなことだ」ぐらいに、軽く

聞き流したのだと思う。のちに当のアメリカ史研究者と「再会」することになるとは想像もできなかった。

十数年にわたるオーバー・ドクターの生活に耐え、信州・上田の長野大学に職をえたのは、私が四十二歳のときであった。新しい研究テーマを模索中だったということ、そしてせっかく信州に赴任してきたのだから、この地域に密着したテーマにとりくみたいと思ったことなどから、やがて私は敗戦直後の下伊那青年団を調査することになった（その成果は「下伊那青年団の平和運動―平和意識論にむけてのモノグラフィ―」〔歴史評論〕第五七三号、一九九八年〕として発表）。かつて青年団運動になった高齢の方々を訪ね、往時の聴き取りも試みたが、印象的だったのは大略次のような語りである。

終戦のあと菊池というアメリカ史の先生が下伊那を巡回して、青年たちを集めては思想や生き方にまつわる講演、あるいは車座の座談会をしたが、私たちはその影響をうけたものだ。菊池先生は自転車に乗れないという噂があったくらいで、とにかくいつも重いカバンをさげ、歩いて村々をまわっていた。

下伊那の村の多くは、中央アルプスと南アルプスに挟まれた急峻な谷あい位置している。私の場合には車でまわったのだが、朝もやのかかる細くて急な坂道を走るときなど、ちょっとした恐怖を覚えたものだった。こんなところを徒歩で移動するなど、私にはとうてい考えられない。またその方々の語り口には、菊池さんと終生政治的立場を同じくした人の場合も、やがて異なる立場に移行した人の場合も、ともに菊池さんを中心に喧々諤々議論した青春時代を懐かしむふうがあったのが、なんだか愉快だった。そこには私たちの世代の体験とは位相差のある、戦後民主主義開花の時代の青年たちの昂揚があったのだろう。

下伊那の菊池さんと高橋先生からお聞きした人物とが、あるいは同一ではないかと気づいたのが、いつのことであったかは覚えていない。おそらく私が菊池さん本人について、調べてみようと思いつ前であつたらう。大阪教育大学に着任した一九九九年には、菊池さんの調査に着手したが、間もなく誌面に掲載された高橋先生の手になる菊池さんへの弔文を見つけ、間違いなく同一人物であることが確認できた。その年末に認めた高橋先生あ

ての賀状に、「いま菊池謙一さんのことを調べています」と添え書きしている。先生は喜んでくださるにちがいないと、少々得意げな気分になっていたようだ。

ただ高橋先生が、菊池さんを政治運動の犠牲者というニュアンスで受けとめておられたのにたいし、私は活字になった菊池さんの時々の文章から、それはそうではなく、さまざまに考えあぐねた結果ではあれ、最終的にはみずからの意志で決めた人生行路なのだと解するようになっていた。住む者のいなくなった旧菊池宅を、史料調査に訪れたのはそんなころだったろうか。段ボール箱いっぱい詰めた大量の英字新聞を目の前にしたとき、私はふいに眼がしらが熱くなるのを禁じえなかった。

研究者としての道をすすむか、それとも運動家として生きてゆくのか、そんな重大な選択を菊池さんが簡単になしたはずがない。たとえ自分の意志で決断したにしても、それで割り切ってすませられるものではないだろう。職業運動家としての多忙をきわめる日々、経済的なゆとりなど想定しがたい暮らし向きではあっても、菊池さんは英字新聞の定期購読をずっとやめなかった。その胸のうちからアメリカ史の専門家でありつづけたい、研究者としての人生をまっとうしたかった、というような思いがつかえることはなかったであろう。こうした人の心のありように思いが至らない自分が情けなかったのか、それとも菊池さんの学問への思いにシンクロしたのか、私はやや感傷的になっていたらしい。

とまれその日の調査により、菊池夫妻の戦時下往復書簡を入手し私は、本篇冒頭の「解説」にも述べたように、同書簡を主な史料とした論文を二〇〇二年にまとめることができた。戦時下往復書簡全文の翻刻刊行は、そのころから意識していたことである。苛酷な時代を懸命に生きた夫婦がのこした心の軌跡の記録、日々の暮らしや出来事の詳細な記録、拙稿はその類をみない貴重な史料のほんの一部を切り取って用いたにすぎない。これで往復書簡が「用済み」になったとは、とても思えなかったのである。しかし当時の私は、「紡績労働者の人間関係と社会意識の歴史」という別のテーマにとりこんでいて、全文翻刻・刊行の仕事は棚上げにしてしまった。

その別テーマの研究が二〇〇九年末、論文集『日本労働運動史序説』の刊行によって、いちおうの区切りがあったとき、私は相応の充実感・達成感とともに、これまで経験したことのない疲労感のようなものを覚えた。自治体史編さん・執筆の仕事を大量にかかえていて、立ち止まることなどありえない状況だったにもかかわらずである。六十歳目前という年齢的な要因が大きかったのであろう。これまで背伸びしてなんとか研究者たちの世界で生きてきたが、獨創性や論証・実証の精度にこだわることであれば、文字どおり浅学非才の私にできることはここまでだ、というような気分にとらわれたのである。

とはいえ私がなすべき研究、なしうる仕事はまだあるはずで、それはいったい何なのか、とりわけ自分の内面からの欲求として、今なしたい仕事は何なのか、というような問いに思いをめぐらせたとき、まさきに脳裏に浮かんだのは、菊池夫妻の戦時下往復書簡の全文翻刻であった。これだけは自分の手でやっておかないと、後悔することになるだろう。そこで心あたりのある出版社に打診してみたが、期待したような反応はえられなかった。無理もない。今どきマルクス主義者の書簡集など、一般に売れるはずがないのだ。こうして再度の棚上げを余儀なくされた。

だがチャンスは思わぬところにひそんでいた。本学の歴史学研究室では、定年退職する教員がいると、その年度に刊行する紀要『歴史研究』を、同教員の退職記念号として例年より大部の冊子につくり、関係諸氏より寄せられた論稿からなる論文集にすることが慣例となっていた。だから二〇一三年度末ころから、私が退職する二〇一五年度の『歴史研究』のことが話題にのぼるようになっていた。ただ教員養成の学部・大学院で、テーマや内容に統一性のない論文集を編むことに、私は前向きになれなかった。ならばどうするか……。

せっかくの機会だから、これまで私が執筆した「書評」「新刊紹介」「大会報告批判」その他雑文を、一冊にまとめるという計画を考えてみた。四十年余も歴史研究にかかわっていると、私でも活字になった書評文・批判文などは相当な量になって、ちょうど退職記念号一冊ぶんに対応する。これはいい案だと思った。しかし何かの拍

子に気がついた。そんな冊子は私個人にとってはありがたくても、学問的にはなんの意味もない、ただの自己満足のためのものでしかない、と。

『歴史研究』退職記念号を、菊池夫妻の戦時下往復書簡集とすることはできないか、などと考えるようになったのは、その気づきの直後からだ。問題は書簡の分量である。頁数はこれまでの退職（退官）記念号の二倍になろう。ただでさえかつかつの教室予算に、過重な負担をしていることにもなってしまう。しかし他にどんな内容の記念号がありうるのか。それにこの機会を逃せば、往復書簡翻刻刊行の可能性は、永久に閉ざされてしまうかもしれない。そんなことをあれこれ考えながら、とにかく二〇一四年九月の教室会議で、私の希望を話してみた。すると意外なほど簡単に、私案を了解していただくことができた。これは本当に感謝である。

さっそくパソコンにむかい、書簡集の原稿を作成する作業を開始した。以来まる一年と半年間、机の前に座ることのできた時間は、ほとんどこの作業についてやした。連日そのようにすごしていると、戦時下におけるお二人の人生を、そのまま追体験したような感覚にもなってくる。不思議なもので、そのうち生身の人のように、その存在をリアルに感じるようになっていた菊池夫妻は、すでにこの世の人ではない。それに対面している自分もそう遠くないうちに、あるいは明日にでも存在しなくなる。こうして死者と、束の間の生をいきる人とが、史料を介して対話する、それこそが歴史研究の原点というものではないのか、などとも考えさせられた。

全文翻刻のつもりで作業していたが、予想外に頁数が多くなり、一部省略せざるをえなくなったこと、解説の執筆や書簡本文の校正に、最低限必要な時間もかけられなかったことなど、いくぶんかの悔いがある。だが自分がしたいと願った仕事である。現役最後の一年半、その作業を中心に日々すごせたことを、私は嬉しく思っている。その間の大変さ、しんどさをふくめ、私にはとても幸せな時間だった。

本篇の作成にあたっては、まず往復書簡をふくむ史料調査の段階で、斎藤俊江・塩沢英・塩沢みどりの各氏、および飯田市立図書館の方々にたいへんお世話になった。菊池夫妻の長女・前田由理さんには、翻刻刊行につい

て同意・許可をいただくとともに、原稿の段階で全文に目をとおし、私の質問に答え、ありし日のご夫妻の貴重な写真も提供していただいた。高砂市史編さん室の井上雅美さんには、私が作成した原稿と書簡本文の写しとを照合し、修正を要する箇所を見つけたすという、面倒な作業を担当していただいた。また伊藤敏雄・田中ひかるの両先生には、私の勝手な企画・提案をころよく了解していただき、財政的にも具体的な作業の面でも、惜しみないご助力をいただいた。これらのみなさまに心からお礼申しあげたい。

最後に信利印刷の宮地浩史さんには、原稿作成の遅れにより、工程上たいへんな無理をお願いすることになったが、それでも刊行期日に間に合わせていただいた。ここに記して謝意を表する次第である。

二〇一六年三月八日

三輪泰史